

学生寮を活用した国際交流、 グローバル人材育成の取り組み

グローバル化が進展する世界において、多角的な視点を持って活躍できる人材の育成が声高に叫ばれる昨今、各大学においては、留学等教育プログラムの拡充に加えて、キャンパス内でもさまざまな工夫した積極的な取り組みを進めている。

その取り組みの一つに、学生寮の活用がある。大学の学生寮は、かつては地方出身者や遠方に住む学生を支援するという側面が強かったが、近年は日本人学生と外国人留学生の「混住型」の形をとり、日常生活の場を活用して教育的な配慮や工夫をすることによって、国際交流や人材育成につなげようとする取り組みがみられ、その様子も変化してきている。

学生寮という共同生活の空間の中で、日本人学生と外国人留学生は、それぞれの国の文化や習慣の違い、歴史などに触れることが、相互理解と国際交流の促進につながる。また、これまでは経済的理由などによって留学のハードルが高かった日本人学生にとって、国内にいながら国際交流経験ができる絶好の機会になり得る。

本特集では、各大学で外国人留学生の数が年々増える一方、キャンパスでは外国人留学生と日本人学生の交流が十分に進まないという声もある中、学生寮を活用して国際交流を促進したり、さらに大学が目指す人材の育成につながるようとする実例をご紹介します。ただき、グッドプラクティスや課題を共有して、大学の学生寮の新しいあり方を考える機会としたい。

グローバル教育のハブ・サロン機能

奥村 経世

●専修大学国際交流センター長、経営学部准教授

TUTグローバルハウス——成長へのスパイラル

高嶋 孝明

●豊橋技術科学大学教授、スーパーグローバル大学推進室長

竹川 清美

●豊橋技術科学大学国際課・特命事務職員

大学の教育力強化を目指す国際交流施設 RYUTOPIA

八木 雅史

●流通科学大学附属国際交流施設学生寮寮長、経済学部教授

国際寮「グローバル・ドミトリー」の挑戦

堀内 一史

●麗澤大学副学長

多文化交流を目的とした国際学生宿舎

下山 裕司

●南山大学国際センター事務室長

国際的な文化交流、相互理解を育む美大の国際寮

森 敏生

●武蔵野美術大学学長補佐（学生支援担当）、造形学部教授

グローバル教育のハブ・サロン機能

奥村 経世 ● 専修大学国際交流センター長、経営学部准教授

1 専修大学の交換留学の状況

専修大学は、「社会知性の開発」という21世紀ビジョンを掲げている。ここでいう社会知性とは、「専門的な知識・技術とそれに基づく思考方法を核としながらも、深い人間理解と倫理観を持ち、地球的視野から独創的な発想により主体的に社会の諸課題の解決に取り組んでいく能力」と定義しており、このビジョンの実現において留学制度は重要な役割を担っている。

本学は、1985年に交換留学制度を開始し、現在では18の国と地域の34の大学などと国際交流協定を結んでいる。2018年度に受け入れた留学生は、学部・大学院の正規留学生を除いて、4週間から3カ月の短期留学生が132名、半年から1年半派遣される協定校の交換

留学生が17名であった。

2 専修大学国際交流会館の概要

留学生寮として長年使用してきた国際研修館が老朽化したため、2014年に「専修大学国際交流会館」を新築した。地上4階建て、延べ床面積が約4100平米の当施設は、国際交流協定校からの交換留学生、日本語と日本事情を学ぶ短期留学生、および留学生アシスタントの専修大学生などが居住する学生居室、海外からの客員教授や研究者が宿泊するゲストルーム、各種イベントや講習などで使用されるインターナショナルホール、自習室として使用されているスタディールームなどから構成される複合施設である。設計に当たって、単なる学生寮という機能を超えて、専修大学生と交換留学生や正規留学



- 生との交流、さらには国際化という視点からの地域貢献といった多様な機能を果たすことが念頭に置かれた。これにより、当施設は、2015年度の神奈川県建築コンクールにおいて優秀賞を受賞した。評価されたのは、次の3点である。
- ① ミニマムな居住空間を使い勝手よく、かつ多文化に配慮できるようなユニバーサル性能を待たせている点。
 - ② 住宅地の中に溶け込ませる配慮を丁寧に行っている点。
 - ③ 特に内部空間は、外部から予測しにくい豊かで洗練

された居住空間を実現している点。

2018年度の居住学生は延べ1万7534人、学生居室の稼働率は年間平均（長期休暇期間を除く）が62.6%となっており、短期留学生の比率が高く、利用者の入れ替わりが頻繁である状況からすると、当施設は十分に活用されているといえる。また、同年度のゲストルームの利用者数は、延べ1194人であった。

3 学生居室

学生居室はツインルームが50室あり、それぞれベッド、クローゼット、机、冷蔵庫を備えている。これら以外に、バリアフリーの居室も2室備えている。学生居室を個室ではなくツインルームとした理由は、「寮内留学」というプログラムも考慮したためである。

寮内留学プログラムは、



本学のグローバル教育の一環として始めた画期的な制度であり、4〜6カ月の期間で年2回実施している。専修大学生をアシスタント学生として常駐させるのではなく、15名の本学学生がレジデント・パートナーとなり、世界各国からの留学生のルームメイトとして共に生活する。

参加学生はプログラム期間中に研修を数回受け、協働生活に必要な英語力と異文化コミュニケーションの力を身に付け、留学生に日本の文化や現状を紹介するための基礎知識を学ぶ。また、プログラム修了時には、文化や生活慣習、価値観の違いなどの学びの成果を発表し、



加えてレポートの提出が義務付けられている。語学力、時間および経済的理由などによって海外留学が困難な学生にもグローバルな状況を経験させるという意味で、当プログラムは参加学生の満足度も高く、グローバル教育の面で大きな成果を

上げている。

これら以外に、年間、延べ20人のレジデント・アシスタントと呼ばれる本学の学生が寮生活のリーダーとして常駐しており、留学生にアドバイスをするとともに、専修大学生と留学生との協働生活の調整役も果たしている。

4 キッチン、ダイニングエリア、レクリエーションルーム

会館に居住する学生の日常生活のために、キッチン、ダイニングエリア、レクリエーションルームの三つの共有空間がある。

キッチンは、学生寮としては本格的な設備が充実しており、ダイニングエリアが館内に複数設けられ、レクリエーションルームにはゆったりとした面積が与えられている。それは、ここに居住する学生が日々の生活を送る上



で食事を作り食べるためばかりでなく、留学生相互や留学生と本学学生との交流促進が企図されているからである。

これらの施設は、居住する学生の交流および憩いの場であるだけではない。一般の専修大学生も、事前登録をすればロビー階のダイニングエリアに出入りすることができるので、個人的な友人関係を作っている者もある。

また、留学生による語学教室や料理パーティー、映画鑑賞などのイベントも実施されている。イベントのいくつかは、専修大学生だけでなく、大学周辺の住民の方々の参加も可能であり、好評をいただいている。専修大学生や正規留学生、交換留学生と地域住民の方々が交流することによって、本学に対する理解が深まり、地域における専修大学の存在意義を認識していただけているという意味で、大学の



国際化教育の推進という目的を超えて、大学と地域との共生促進という面でも大きく貢献していると考えている。

5 スタディールームとインターナショナルホール

3室のスタディールームは、通常は学生の自習室として使用されている。学生は各居室において自習が可能であるが、スタディールームにはパソコンやプリンター、Wi-Fiが設置されているため、レポートを作成する場合やグループワークの場合など、状況に応じて、学生が自習の場を自由に選択することができる。

また、定員80名の会議室（山田長満インターナショナルホール）も有している。本学は海外留学を目指す学生のための留学支援講座や、留学の事前研修などを実施しており、スタディールームとインターナショナルホールは主にこれらのために使



用されている。留学支援講座の受講者数は、年間約700名であった。さらに、このインターナショナルホールでは、海外からの客員教授による市民向けの公開講座も年間10回から20回程度行われている。参加した地元の方々には好評であり、本学の地域貢献において大きな役割を果たしている。

6 専修大学の国際化のためのハブ機能

以上のように、専修大学国際交流会館は、その名が示すように、単なる学生寮を超えて、本学とその周辺地域における多様な国際交流のハブとしての役割を果たしている点特徴的である。

大学が全ての学生に海外留学の機会を提供することは、現実として不可能である。それゆえ、国内にとどまり、キャンパスの中で学生生活を送る多数の学生に「世界に触れる」機会を提供するためには、キャンパスの中にグローバルな場を作ることが必要である。その意味において、キャンパスの片隅に位置する国際交流会館は大きな貢献をする可能性を持っている。

たとえ海外に留学する機会が無くても、国際交流会館に行けば、そこに「世界」があり、さまざまな国の学生

の友人を作ることができ、他国の文化などを知ることができる。他国の留学生と交流することによって視野を広げ、多様な価値観があることを理解し、複眼的に考える力を育てることができであろう。学生によっては、これによって留学を目指す気持ちが高まり、勉学の意欲を高めるかもしれない。このように、百人百様の形で国際性を高めるきっかけが、国際交流会館にはある。また、それは同時に、専修大学に来る留学生が日本についてより多く学び、より深く理解して帰国することにもつながる。そのために、より多くの専修大学生がここに足を運び、世界各国からの留学生と交流を深めるよう働きかけていかねばならないと考えている。

7 サロンとしての国際交流会館

大学が国際化教育を推進するためには、グローバルイズムの醸成をにらんだ授業をカリキュラムに取り入れることや、留学プログラムを整備することは、必要条件である。しかしながら、大学側がそのような努力をしたとしても、学生の側にそれを受け入れる姿勢が無ければ、十分な成果を上げることができない。

大学は「サロン」の機能を本来持っていた。人々が自



い学びを得ようと海外に目を向けようとする意欲を持つために、国際交流会館がグローバルなサロンとしての存在感を一層高め、その熱気が専修大学のキャンパス全体に伝搬していくことを願っている。

㊦

由に集い、相互の対話を通じて知的に交流し、対話によって知的に刺激され、啓発されて帰っていく。そのような場がサロンである。そこに集う人々には、自己の知的な成長を求める自主性と自律性が不可欠である。本学の学生が主体的に学ぶ姿勢を持つようになるために、また、より深く広



学生寮を活用した国際交流、グローバル人材育成の取り組み

TUTグローバルハウス——成長へのスパイラル

高嶋 孝明 ●豊橋技術科学大学教授、スーパーグローバル大学推進室長
竹川 清美 ●豊橋技術科学大学国際課・特命事務職員

はじめに

「TUT (Toyohashi University of Technology) グローバルハウス」は、豊橋技術科学大学キャンパス内にある、日本人学生と外国人留学生が共同生活を送るシェアハウス型のグローバル学生宿舎である。この宿舎のユニークな点は、国際競争力強化とグローバル人材育成を目的した大学改革のコアとして開始した、「グローバル技術科学アーキテクト養成コース」(GAC: Global Technology Architects Course)の構成要素として、人材育成の重要な役割を果たしていることにある。

GACの学部学生は、全員が2年間または4年間ここに居住し、宿舎の生活・学習プログラム(Living &

Learning Program)を通じて、「目標設定・実践・自己振り返り」のサイクルを繰り返し、グローバルに活躍できる人材へとスパイラル的に成長する。

1 グローバル化戦略とGAC

本学は愛知県豊橋市にある工学系の国立大学であり、学部・大学院一貫教育により、実践的、創造的かつ指導的技術者・研究者の養成を基本理念としている。開学当初から、東南アジア諸国を中心に国際交流を活発に行い、世界に開かれたトップクラスの工学系大学を目指してきた。学生の多くは高等専門学校から3年次に編入するが、高等学校卒業生や海外からの留学生の受け入れにも力を入れている。

2013年に「スーパーグローバル大学」に採択されたことを機に、国際通用性と競争力の高い大学への変革を目指して「多文化共生・グローバルキャンパス」の実現に本格的に着手した。その一環としてGACを新設し、グローバル社会で活躍する人材を育成する一方、GACの学生約300名が大学全体の約2000名の学生のグローバル化の先導的役割を果たすことを目指している。

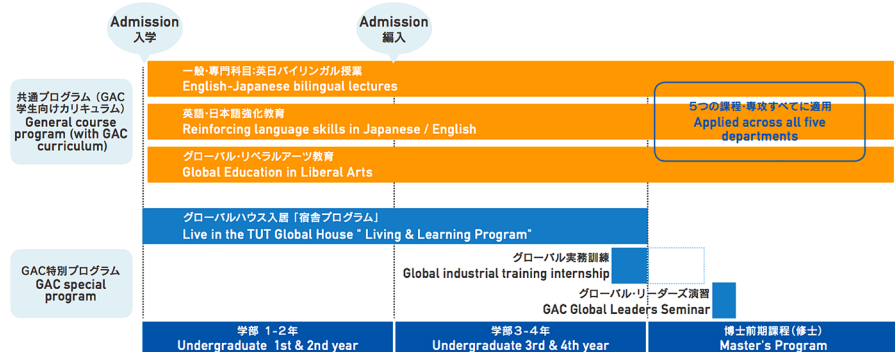
2 グローバル技術科学アーキテクト養成コース(GAC)

「グローバル技術科学アーキテクト」とは、豊橋技術科学大学のスーパーグローバル大学構想において養成を目指す人材像であり、「グローバルな課題を発見し、分析・解決するための俯瞰的な構想・設計力を有し、具体的な作りを主導できる高い技術力と科学的素養に裏付けられた上級技術者」である。その人材育成を先導するプログラムとして2017年にスタートしたのがGACであり、現在3年目に入った。

GACは、日本人学生・外国人留学生在が共に学ぶ、学部・博士前期課程（修士課程）の一貫コースであり、5つの課程・専攻（学科）全てに設置している。これまで

の実績ある高度技術者育成に加え、グローバル社会で活躍する上で求められる三つの能力、すなわち「グローバル・コミュニケーション能力」「多様な価値観の下での課題解決能力」「世界に通用する人間力」にフォーカスしたプログラム構成としている。

そのために、英日バイリンガル授業の全学実施や語学力の強化に向けたカリキュラム編成などの改革を進めているが、何よりもその最大の特色は、学びの



GAC コース概要

場を、教室内だけでなく、宿舍、キャンパス、世界に広げていることである。さまざまなロケーションおよび環境の下で多様な経験を積み重ねていくことにより、学びのサイクルを回し、スパイラル式に成長を高めていく。

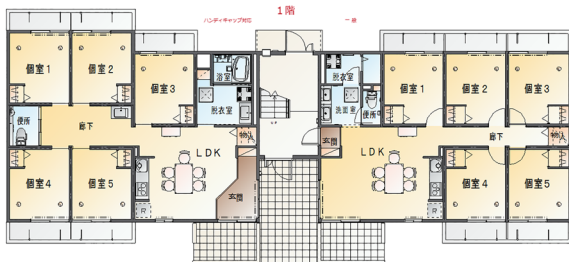
全学生が専門科目を英日バイリンガル授業で受講するが（国際プログラムを除く）、GACの学生は、さらに語学強化と世界に通用するリベラルアーツの素養を高めることに重点をおいた特別カリキュラムを受講する。また、開学以来実施している、産業界と協業した教育プログラムである実務訓練は、母国語圏以外における実施を義務付けている。さらに、グローバル宿舍での生活・学習プログラムに参加し、課題解決やファシリテーション、リーダーシップ発揮の実体験をする。そして、大学院においてGAC学生のために特別に開発した「グローバル・リーダーズ演習」を受講し、論理的な理解・分析と実践による体得をそれまでの体験と経験の上に積み上げるという一連の流れを通して、グローバル人材として必要な能力を身に付けていく。

3 TUTグローバルハウス

TUTグローバルハウスは、GACの学生が国内にい



TUT グローバルハウス



TUT グローバルハウスの間取り

ながらにして国際的な生活を体験できる、ユニークなシェアハウス型宿舍である。グローバル社会の疑似体験を通じて、コミュニケーション能力や人間力を養うことを目的に学内に新設した。GAC学生は全員、学部期間中の4年間（3年次編入学生は2年間）ここで暮らし、生活・学習プログラムに参加することを必須としている。

ここでは、日本人学生と外国人留学生5人が「ユニット」と呼ばれる空間で共同生活を送る。一つのユニット



「緑～つながり～」コンセプト

にはそれぞれの個室があり、リビング・ダイニング、キッチン、浴室などは共同使用する。ユニットには、学年や国籍、出身地がさまざまな学生が一緒に暮らす。

つながりを広げることを意識した構造として

おり、学内コンペで最優秀賞となった学生の作品「緑～つながり～」を

はもろんのこと、隣り合う二つのユニットは共有バルコニーやコミュニティテラスでつながり、3階建て30名収容の棟が6棟、コミュニティロジでつながり、さらに、開かれたスペースや立地を利用してほかの学生宿舎やキャンパスにつながるという、多様なつながりが生まれるデザインとしている。



ユニットの様子

4 グローバル宿舎 Living & Learning Program

生活・学習プログラムでは「Living & Learning」の示す通り、生活や活動を通して学びを得ることを目指している。実践による学生相互の学び合いと自己の振り返りを繰り返すことにより、学びをより深め、高められることが特徴である。

Living & Learning Program では、次の三つのステップを経て学生の成長を促していく。

〈三つのステップ〉

- ① 体感する・シェアハウス型ユニットに居住し、グローバル社会の多様性を肌で体感する。
 - ② センスを身に付ける・ユニットの生活とイベントなどの企画・実施を通して、互いを理解・尊重し、連帯・共感する力とセンスを身に付ける。
 - ③ 生活の質を高める・文化・価値観の相違から生じる課題を、対話を通じて自主的に解決し、それを契機に共同生活の質をより高める方向に導く。
- 具体的な活動としては、次の3点を行う。
- (1) 大学と連携しながら、宿舎（ユニット）を自主的に

運営。

- (2) 大学や地域を巻き込んだイベントなどを企画・実施。
- (3) 半期ごとの目標設定とレポートによる自己評価を通じた成長へのコミット。

5 Living & Learning Program の活動

活動の詳細は以下の通りである。

- (1) 大学と連携しながら、**宿舎（ユニット）**を自主的に運営

ユニット運営においては、居住者が互いを尊重し、理解し合って暮らすことが求められる。各ユニットでは独自のルールを作り、異なる価値観を持つ者同士が快適に暮らせるような工夫をしている。

月ごとに持ち回りでユニット内のリーダーを担当し、全員がリーダーとフォロワーの両方の役割を経験することを意図した「ユニットリーダー制」としている。ユニットリーダーは月に1回「ユニットリーダーミーティング」に参加し、そこで生活における課題を共有し、解決策を議論したり、課題解決手法を学んだりする。

- (2) 大学や地域を巻き込んだイベントなどの企画と実施
イベントの企画・実施は、グローバルハウス学生会を

中心に学生主体で行う。協働作業を通して互いに学び合い、コミュニケーション能力、リーダーシップなどを複合的に身に付ける。

〈イベント実施例〉

・宿舎内交流イベント・新入居者歓迎会、バーベキューパーティ、歓送会、グローバルハウス総会

・キャンパス内交流イベント・国際理解フォーラム

・地域を巻き込んだイベント・企業交流会、夏祭り

2018年度は、これらのイベントを実施した。学生は学業やアルバイトに忙しく、宿舎内で顔を合わせる機会は意外に少ない。そのため、宿舎内交流イベントは、安心感や信頼関係の醸成を意識した内容とした。一方、地域を巻き込んだイベントでは、「グローバル」をキーワードとしていた。例えば、「企業交流会」では、英日バイリンガルで地元企業の経営幹部と食事をしながら



夏祭りの様子

ら活発に意見交換を行った。「夏祭り」には学内外の外国人留学生や地域の外国人居住者が参加し、流しそうめんや水鉄砲などを一緒に体験することにより、文化交流の場とした。

(3) 半期ごとの目標設定とレポートによる自己評価を通じた成長へのコミット

目標を設定し、実際に行動し、自身で振り返り、レポートとして提出するサイクルを半期ごとに繰り返し実施している。これにより、自己分析と自己評価を経験し、またサポート教職員のフィードバックを元に、改めて現在の自分の位置と進みたい場所を見つめる機会となる。繰り返し自己の行動を振り返る機会を持つことにより、活動をやりっぱなしにせず、自らの成長に結び付けることができる。

6 グローバルハウス2・0へ向けて

2017年のグローバルハウス新設から、学生の様子をモニターしながら、学生がより参加しやすく、得るものが大きくなるようにプログラム内容の改善を重ねてきた。2年を経過した2019年度からは、これまでの経験の蓄積を生かし、「グローバルハウス2・0」としてプ

ログラムのバージョンアップを図っている。

例えば、知識のインプットをより手厚くし、学生相互の接触機会を増やすために、前述の「ユニットリーダー制」や、「GACピアセッション」を導入した。「GACピアセッション」では、各種テーマに基づいたグループワークを通して、知識を得ながら同学年のGAC学生が相互に学び合い、同時に語学運用力を高める（セッション中は日本人は英語、外国人留学生は日本語を使用）ことを目的としている。さらに、GAC学生の一期生が大学院に進学した本年度からは、先輩GAC学生が後輩GAC学生を支援・指導する流れを作り、本学のグローバルハウス風土の醸成と定着を目指している。

「グローバルハウス2・0」では、学生はより厚みのある体験をして、成長パイラルを加速させていく。同時に、彼らが互いに高め合うことが、TUTグローバルハウスの、そしてキャンパス全体、さらには地域のグローバル化の推進力となることを期待している。



学生寮を活用した国際交流、グローバル人材育成の取り組み

大学の教育力強化を目指す国際交流施設「RYUTOPIA」

八木 雅史

●流通科学大学附属国際交流施設学生寮寮長、経済学部教授

はじめに

流通科学大学は、神戸市西区に所在する。JR三宮駅から、神戸市営地下鉄で23分ほどの学園都市駅が最寄り駅である。駅名からうかがい知れるように、近くには兵庫県立大学、神戸市立外国語大学、神戸芸術工科大学、神戸市看護大学、神戸市立工業高等専門学校などが集まり、教育研究に適した環境の中に本学は位置する。

本学は、商学部（定員450名）、経済学部（定員200名）、人間社会学部（250名）の3学部7学科により構成される、学生総数4000名弱の、比較的規模の小さな大学である。「流通を科学」することと「グローバル教育」を建学の理念とする。

1 国際交流施設学生寮建設の経緯

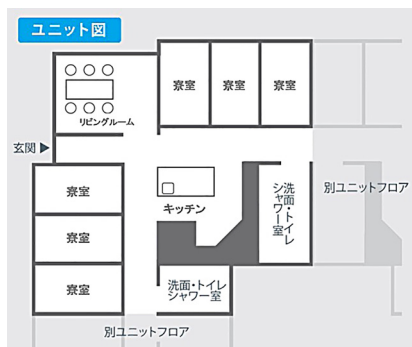
1988年4月開学の本学は、2018年4月に創立30周年を迎えるに当たり、改めて将来に向けた大学コンセプトの根本的な見直しを検討した。その結果、本学は教育力の一層の充実を図るとともに、その教育力の高さを社会に訴求していくことを志向することになった。



その上で、本学の教育力を向上させる具体的施策として挙げたのが、本学のデイプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーの全面的な見直し、初年次教育（「気づきの教育」）の実践、課外活動による人間形成、および国際交流施設学生寮における共同生活・国際交流による人間的成長の教育である。

2 施設の概要

2018年2月竣工の国際交流施設学生寮は、学内で愛称を募集した結果、「RYUTOPIA（りゅうとぴあ）」と呼ばれている。RYUTOPIAは本学の敷地内にあり、約



13万8000㎡の敷地に建つ鉄筋コンクリート造り3階建て（建築面積約3000㎡）の建物である。実際には、3階建てのABC4棟が互いに間隔を保ちながら正方形に並ぶ構造をしており、その結果、十字型をした吹き抜けの中庭を持つこ

とになり、寮内のイベントなどでは中央のピロティを中心に会場として利用される。

1階部分は、寮事務室のほか、多目的室1、多目的室2、レクリエーションルーム、自習室、和室、男女別のバスラブ付き浴室などを有する共用スペースとなっており、住み込みの管理人ご夫婦用の居住区画も含む。食堂はなく、外食する場合には大学のレストランを利用するか、歩いて5分ほどの駅前まで行くことになる。

2階と3階部分が、寮生の居住スペースとなっている。

各棟、男女ともに二つのユニット（6人制）が廊下でつながり、男女では使用する玄関が異なる。

また、男女居住区域の境界は廊下に設置された開閉式扉（非常時には自動的に開放）により、通常は閉ざされている。各ユニットには六つの寮室（個室）があり、ほかに共同のキッチンとリビング、



二つのトイレとシャワールームが備わっている。

3 寮生の構成

RYUTOPIAでは、32ユニットに最大192名が共同生活を送ることが想定されているが、実際にはまだ2年目なので、3・4年目の入寮者分を確保しておくために、6月末時点の寮生総数は114名となっている。日本人男子学生36名、同女子学生26名、男子留学生22名（中国7、ベトナム3、香港4、マレーシア1、台湾3、韓国2、ネパール1、米国1）、女子留学生30名（中国10、ベトナム8、香港5、マレーシア4、台湾1、韓国1、カンボジア1）が、その内訳である。

寮の定員は、男女比率も日本人学生と留学生の比率も半々としている。本学全体の女子学生比率が21・6%、留学生比率が14・4%であることを考えれば、女子学生と留学生にかなりのウエイトを置いている。女子学生については、一人住まいに対する不安を大学として配慮した結果であるし、留学生については、国際交流を推進しようとする意欲の表れであるといつてよい。

4 教育上のねらい

RYUTOPIA設立の教育上のねらいは、二つある。

一つは、他人との共同生活を体験することにより、互いに快適で有意義な生活を実現していくためにルールやマナーを守ることの重要性、および他人への気遣いの必要性を学ぶことである。寮の主なルールは、禁煙、夜12時の門限、夜間の騒音防止、2カ月ごとの大掃除、外泊届などの手続き順守など。マナーについては、挨拶の励行、共用スペースを清潔に保つことなどである。

二つ目は、さまざまな国の留学生と日本人学生が日常生活の中で親しく交流することにより、異文化に対する興味や理解を深め、国や宗教や言語を越えて、人格のみを介して友情を築くことができる視野の広い人間を育てていくことである。すなわち、本学の校是である「ネアカのびのびへこたれず」を体現するような卒業生の輩出を目指している。

(1) 共同生活を通じた成長

本施設では、ユニット制を採用している。ユニットリーダーを含む6人を共同生活の単位とするものである。各

ユニットの構成は、日本人と留学生をほぼ半数とし、学年・学内所属団体や出身地などにできるだけ偏りが無いように配慮している。

あえて少人数による共同生活とし、価値観や生活リズムが異なる者を同居させることにより、当然発生するさまざまな生活上のトラブルを、自分たちで話し合い、自分たちで工夫して解決する。そのことを通じた学びと成長を期待しているのである。

その場合に重要なことは、ユニットリーダーの役割である。メンバー全員の迷惑への配慮を怠らず、それぞれの利害の内容や軽重を公正に判断し、適切な解決へとメンバーを導いていく。将来、社会に出てリーダーシップを発揮できるような学生の育成につながるものと考えている。

(2) 国際交流を通じたグローバルな視野の育成

本施設は、前記のように男女ともに寮生のほぼ半数が留学生である。したがって、ユニットや学生寮で生活すること自体が国際交流の実践を意味する。しかし、実際には、留学生になかなか声をかけられない学生や、生活リズムが異なる結果、すれ違いばかりの寮生も存在する。



そのため、国際交流の実効をより高めることを目的とするさまざまなイベントを開催し、留学生を含めて多数の寮生の参加を呼び掛けることが有効である。

入寮パーティーなど大規模側が主催する諸行事のほかに、2018年7月に10名ほどの寮生が任意団体である学生企画部R

PG (Ryutopia Planning Group) を自主的につくり、カレーパーティー(6月)、流しそうめん(7月)、バーベキュー大会(8月)、月見の会(9月)、ハロウィンパーティー(10月)、クリスマスパーティー(12月)、もちつき大会(1月)、まめまき大会(2月)などのイベントを次々と企画運営。ほぼ毎回、30名を超える参加者を集め、本年度も活動を継続中である。

また、寮生が自発的に始めた別の企画として、語学の勉強会がある。現在は韓国語と英語と日本語について(か



つては中国語もあった)、それぞれを母国語とする寮生が教師となり、原則として毎週1時間程度、



希望する寮生を集めて勉強会を開いている。

さらに、近隣の高校の華道部や茶道部などに呼びかけ、RYUTOPIA内の和室(炉を切った茶室もある)を提供することにより、日本の伝統文化の体験を介した本学留学生との高大連携型交流の展開も始動している。

5 寮生の国際交流意識

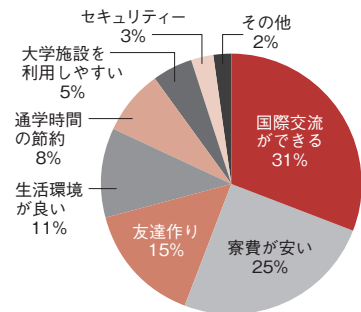
本稿の執筆に当たって、国際交流に対する寮生の意識調査のためのアンケートを5月に実施した。正直な気持ち

ちの把握にこだわって無記名回答としたため、回収率が悪く、64件(56%)であったことが残念である。内訳は4年生6名、3年生4名、2年生25名、1年生29名。男子27名、女子37名。日本人学生39名、留学生25名であった。

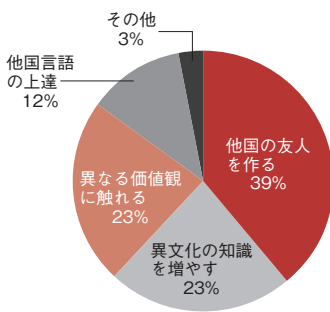
入寮を希望した第1の理由を問う質問では、国際交流が31%で1位であり、第2の理由を問う別の質問でも16%であったことから、約半数の寮生が国際交流の体験を重要な目的として入寮したものと考えられる。

また、交際交流で期

図表1 入寮の第1理由



図表2 国際交流の目的



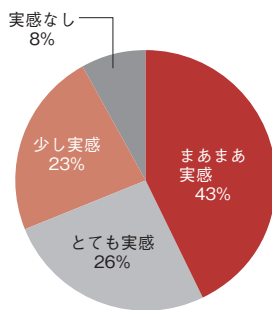
待するものを問う質問では、1位は「他国の友人を作る」(39%)、2位「異文化の知識を増やす」(23%)、3位「異なる価値観に触れる」(23%)、4位「他国言語の上達」(12%)と、あらかじめ考えていた以上に拮抗していた。実際に入寮してみ

て国際交流を実感しているかを問う質問で、「とても実感」(26%)、「まあまあ実感」(43%)を合計すると、回答者の約7割が実感していることになる。その42名中12名が1年生であり、寮の国際交流イベントの未経験者であることからすると、ユニットの生活自体をすでにそれなりの国際交流体験と感じているのではないだろうか。

おわりに

RYUTOPIAの運営はまだ2年目に入ったばかりである。国際交流の内容は一からの試行錯誤の段階であり、

図表3 実感の有無



またユニットリーダーをいかに育てるかについても定見を未だ持たない時点での本稿が、他大学にとっていかほどの参考材料を提供できたかは心もとない限りである。本来は2021年の完成年度後に、既出の全ての課題とその対処について検証を行った上で報告すべきであったかもしれない。

しかし、国際交流施設学生寮「RYUTOPIA」の存在が、教育力の充実に向かって今後ともチャレンジし続ける本学にとって、かけがえのない可能性の場であることは間違いない。学生寮で醸成された国際交流力を使って、他大学との交流、高大連携の強化、地域(小中学校を含む)との交流、そして大学の変革にも及ぶかもしれない。

※本施設の設営方針などを検討するに当たっては、同様の先進的事業をすでに展開されている多くの大学へ聞き取りを行い、その際には担当諸氏から丁寧なご説明と、有意義なご助言を数多くいただいた。また、見学のため訪問した節には、貴重な時間を快く割いていただいた上、丁寧な案内を賜った。殊に、麗澤大学様には、ユニット制やユニットリーダーの導入など、貴重なご教示を多々いただいた。この稿を借りて深く感謝し、お礼申し上げます。

国際寮「グローバル・ドミトリ」の挑戦

堀内 一史 ●麗澤大学副学長

はじめに

麗澤大学は、千葉県柏市の市街地からほどよい距離を置いた緑豊かな丘陵地帯に位置し、外国語学部と経済学部の2学部（2020年度に国際学部を新設予定）および大学院（3研究科）からなる私立大学である。2019年5月1日現在の学生数は2922名、そのおよそ17%に当たる海外からの留学生485名が学んでいる。1935年、本学の前身である道徳科学専攻塾が法学博士廣池千九郎によって創設されて以来、「知徳一体」の建学の精神と、それを培う学生の自治による寮生活、および語学教育は、本学の教育の基盤として重視され、時代に適合した形で現代にも受け継がれている。

グローバル化が進む昨今、世界に通用する語学力やコ

ミュニケーション能力、主体的・積極的に課題に取り組む力、異文化を理解する力といった能力を備えた「グローバル人材」の育成は喫緊の課題とされているが、本学は、こうした課題に対応すべく、2013年、国際寮「グローバル・ドミトリ」を開設した。

1 グローバル・ドミトリへの歩み

大学教育で求められている「学士力」や「社会人基礎力」は、学生諸個人の人格形成の根幹に関わるものであるが、それらはカリキュラムで定められた正課の授業を通して習得されるものであると同時に、正課外の学生生活全般を通して育成されるものである。その意味で、これらの力の習得は、授業のみならず学生一人一人の日常生活に深く関わる課題でもある。



グローバル・ドミトリーの外観

本学の学生寮は単なる生活の場ではなく、開学当初より、人格陶冶の場、道徳的行為の実践の場として位置付けられてきた。創立者廣池千九郎が、専攻塾本科規則の第11条において「全学生を寄宿舎に入寮せしめ、日夜、知徳一体の教育を行い、各人の最高人格を完成せしむ」と述べているように、当時の寮教育は、正課のカリキュラムに基づく教育と並んで重要な本学独自の教育としての位置を占めていた。当時、学生寮の玄関には、「自我没却神意実現之自治制」と書かれた扁額が掲げられ、学生

各人の生活上の指針とされていた。寮生活とされてきた。寮生活とは、学生が共同生活を通じて自らを律し、自己中心的な言動を慎んで、自分、相手、第三者を利するように考え、行動することが重んじられた。

建学の精神と自治による寮生活のあり方は、時代の変遷とともに変

化してきた。開学当初は全寮制であり、学生寮は人形形成の場として明確に位置付けられていた。当時の寮は木造平屋建てであり、板間の廊下と障子で仕切られた畳敷きの和室が数室、廊下に沿って配置され、各部屋には布団を収納する押し入れが設えられ、数名が共同生活を送っていた。

1942年から1949年まで語学の専門学校として教育活動を展開し、50年には麗澤短期大学として英語科が新設されるが、それに伴い、新たな学生寮が建設された。鉄筋3階建てで、各部屋には2段ベッドを2台入れた。3・4名が共同生活できる洋風のフロアリングを採り入れたものであった。

1959年、4年制大学として麗澤大学が開学した。本学が海外から留学生を初めて受け入れたのは、麗澤日本語学校が開設された1972年であった。初年度は10名の留学生が入学し、1年間日本語を学んだ。1973年当時、本学はイギリス語学科（1986年英語学科に改称）、中国語学科、ドイツ語学科の3学科からなる外国語学部のみのものであったが、学生寮の部屋のメンバー構成が学科ごとであったため、中国語学科生などは夕食後に上級生から発音指導を受けるのが慣例となっていた。

こうした活動は、正課外の「隠れたカリキュラム」として寮生の語学力を一層向上させた。

1980年代には、時代のニーズに合わせてプライベートの確保を目的とする個室が登場する。建物は5階建てとなったが、大学の規模拡大と学生数の増加に伴い、全寮制は廃止され、希望者が入居する学生寮となる。80年代になって、個室を採り入れたことにより、隠れたカリキュラムの希薄化が進んだ。

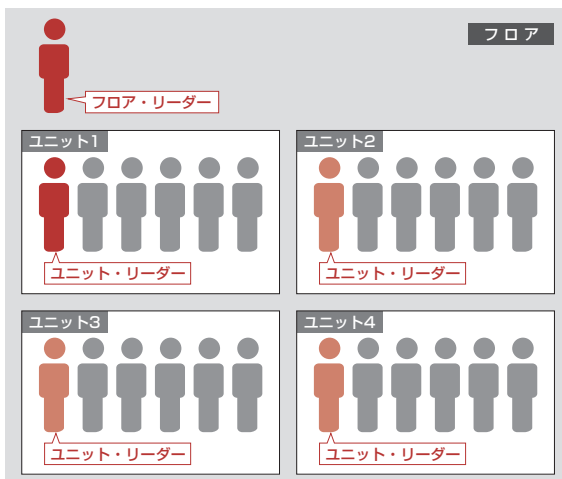
1990年には海外からの留学生数が100名を超え、2005年以降の数年間には500名以上と、全学生数に対する比率が21%に達した年もあったが、2011年以降は400名台となり、留学生比率は16%前後の水準を保っている。

2 国際的な学びの共同体 (Global Learning Community)

留学生の増加に伴い、2013年には、プライベートを確保しつつも相互にコミュニケーションをとることができ、同時にかつてのコミュニケーションをとることで、人間関係が維持できるように、六つの個室からなる本学初のユニット制が導入された。この変革が、寮の運営に

とって大きな変化をもたらす結果となった。ユニット6名の中のユニット・リーダー（以下、UL）が、メンバーを掌握し世話をする、かつての寮長の役割を担うことになる。ユニットの構成メンバーが少数になったことによつて、家族のようなまとまりのあるコミュニティが形成できるようになった。ユニットは、プライベートなスペースとしての個室と、キッチン、リビングルーム、洗濯室、トイレ、

シャワールームなどの公共スペースで構成される。六つの個室からなるユニットが四つ集まって1フロアを形成し、4名のULのうち1名が、



図表1



グローバル・ドミトリの玄関先

他の3名を掌握するフロア・リーダー（以下、FL）の役割を担っている。

現在、3棟の新寮に200名、旧寮には77名、合計277名の寮生が共同生活を送っている。内訳は、女子が186名、男子が91名、日本人の寮生が141名、加えて海外からの留学生在が136名である。留学生の出身国は19カ国に及ぶ。学生寮では、ULとFLの下、各学年の寮生が生活を共にしている。通常、経験豊富な上級生がULやFLの役割を担い、下級生の相談を受けたりサ

ポートしたりすることによって人間的に成長するとともに、社会人基礎力を身に付けている。本学が同学年の寮生のみで構成された寮体制を採用しない理由は、このような教育理念にある。

学生寮の運営体制については、月に一度開催されるUL会議とF

L会議が中心的機能を担い、各種情報の共有と寮生活上の諸問題が議論されている。また、52名で構成するUL会議の上に、12名によるFL会議を置いた二重構造の会議体によって寮生の意見を集約し、寮運営上の課題の解決を図っている。

前述したように、現在は寮生のおよそ半数を占める外国人留学生在が日本人学生と共に暮らしている。寮は学生がそれぞれに国際的な感覚を養い、人間性を高める学びの場として意義付けられ、グローバル化時代にふさわしく、「国際的な学びの共同体」の形成をコンセプトにしている。

ユニット制の採用後は、4人部屋時代の隠れたカリキュラムが復活しつつある。英語圏からの留学生やドイツ語圏からの留学生をユニットに1人加え、その言語を学ぶ寮生を集めたユニットや、さまざまな言語を話す留学



女子寮リビングルーム



個室



多目的ホール



キッチン



男子寮リビングルーム

生と日本人学生が日本語で共同生活をするユニットなど多彩である。

学生は、授業を終えて寮に戻れば、異文化交流がいつでも可能である。学びの共同体として寮生が企画運営するハロウィーンやクリスマスなどのパーティー、流し素麺やお花見などの季節のイベント、その他スポーツ大会やクリーンキャンペーンなどのイベントを通して日本人と留学生が親睦を深め、異文化交流が図られている。

このように、時代の流れや多様化した学生の価値観・

気風に応じて学生寮の形態は変化し、教育体制としての「知徳一体」や自治制の理念は、限定的ながら、いまま受け継がれており、留学生の増加に伴い、寮内における異文化交流や語学教育の需要と機運が高まりつつある。

3 ささらなる挑戦

本学は、2020年度に予定されている語学寮の開設に向けて準備を進めている。中国語寮と英語寮である。

中国語寮は外国語学部外国語学科中国語・グローバル

コミュニケーション専攻の学生、英語寮は新設予定の国際学部国際学科およびグローバルビジネス学科の学生を対象として、入寮希望者を募る方針である。この語学寮は学部のカリキュラムと有機的に結び付いており、40校を超える留学提携校への留学と連動させるなど、グローバル人材を育成するためのさまざまな仕掛けが設定されている。

中国語寮では1・2年生が集中的に中国語を学び、3年次に全員が中国語圏への留学を目指す。さらには、英語力も同時に向上させるため、英語を必須科目としている。グローバルビジネス学科の学生は1年次の夏休み全員、米国、豪州、フィリピンの提携校の中から選択して語学留学をした後、2年次の2学期から提携校への交換留学や専門留学に飛び立てるようにカリキュラムが設計されている。そうした学生にとって、英語寮は異文化理解を実践する場となり、留学の準備には最適の環境となる。

特定のフロアを語学寮に充てることに加え、留学から帰国した日本人学生や中国語、あるいは英語話者の留学生が必ずユニットメイトになるため、学生が任意に外国語を話していた従来のグローバル・ドミトリーとは異なっ

て、寮生は授業で学んだ言語表現を寮内で存分に生かすことのできる環境に日常的に身を置くことになり、語学力の飛躍的向上が期待できる。フロア内の Study Room にはパーティション付きデスクやパソコンを配置して、寮生自身の個室とは異なる身近な環境で、ウェブを利用した外国語学習の自習体制を確立する。

中国語または英語の教員が、夜間、定期的に語学寮を訪問し、寮生と会話をしたり、文化や言語に関する質問を受けたりするなど、打ち解けた雰囲気の中で指導を行う。それは教室における「教師―学生」の関係ではなく、いわば、留学先のホームステイのホストマザーやファザーのように、留学という非日常性を疑似体験できる環境を創出し、寮生がターゲット言語を話す自信を付けさせる。そうした環境の中で、春節やサンクスギビングなど、ターゲット言語による文化イベントも盛りだくさんに計画されている。



多文化交流を目的とした国際学生宿舎

下山 裕司 ● 南山大学国際センター事務室長

1 国際学生宿舎の理念と歴史

南山大学の国際学生宿舎の歴史は、1994年に設置した南山大学交流会館に始まる。キャンパス用地として取得した土地に建つ社宅を改装し、合計14アパートメントを宿舎として設定した。一つのアパートメントには、2名の留学生と1名の日本人学生が共有部分をシェアする形で共同生活を開始した。当時、このように留学生と日本人学生の多文化交流を目的とした混住寮タイプの宿舎は、全国的に珍しい例であった。以来、約25年にわたって、単なる留学生寮ではなく、学生同士の多文化交流を目的とする宿舎を提供し続けている。1997年には、キャンパスからほど近い場所にある本学教員寮を改装した山里交流会館を、1999年にはキャンパス正門前に

名古屋交流会館を設置した。これらの国際学生宿舎には、主に1学期または1年間、外国人留学生別科 (Center for Japanese Studies) と日本語・日本文化を学修する留学生を受け入れた。交流会館は、多様な文化を持つ学生が共同生活を通して、教室では体験できない生きた多文化交流を学ぶことができる場である。この体験を学びの一步として、その後1学期または1年の海外留学を果たす日本人学生も多い。このような学内国際交流を経て海外へ飛び立つ過程は、



北欧家具でリニューアルした名古屋交流会館の一室

現在、南山大学が国際化推進において掲げるロードマップ「Nanzan Global Pathways: Hop, Step, and Jump to the World」に合致するものである。

国際学生宿舎は、学部・大学院留学生にも提供している。2000年、本学は瀬戸キャンパス開設とともに、毎年30名程度の外国人留学生を受け入れる総合政策学部を設置し、留学生が4年間居住できる瀬戸交流会館を2館新設した。総合政策学部の留学生は、推薦協定を締結する諸外国の高等学校や機関から推薦され、日本語未習者であっても入学できる。留学生は、入学後約1年半、日本語を集中的に学習し、その後の2年半でその他の共通教育科目および学部専門科目を修め、4年間で卒業が可能となる。こうした日本語が十分でない留学生に対し、日本での生活に適應できるよう、日本人学生による生活サポートに加え、舎監教員による定期的なミーティングやルームチェックを通じて、厳格なルールの理解を促し、手厚い指導を施してきた。

2 交流会館からUR千代が丘住宅へ

2017年4月、瀬戸キャンパスは名古屋キャンパスとの統合により、瀬戸交流会館に居住する総合政策学部

の約100名の留学生の新たな受け入れ先を検討した。検討の過程では、本学が遠隔地からの入学者向けに提供する学生マンションや近隣のマンションを留学生に開放する案もあったが、それらはいずれもワンルームタイプであり、多くの日本語未習の新入生が一人暮らしに困ることを回避するため、従来の多文化交流混住型を受け継ぐことを基本方針に据えた。この方針に沿う物件を複数探した結果、キャンパスからの距離や家賃の面で好条件であった独立行政法人都市再生機構（UR都市機構）が管



935戸を擁するUR千代が丘団地

理する千代が丘団地（以下、UR千代が丘住宅）*から23ユニットを借り上げることになった。元来の家族用住宅3LDKまたは4LDKを活用し、従来の交流会館と同じ多文化交流型の宿舎を実現することができた。

土地の購入や建物の建設にかかる費用をかけずに宿舎として利用できるというメリットの一方で、千代が

丘団地に居住するほかの住民との共生については、かなり不安要素を斟酌した。例えば、ゴミの出し方や自転車置き場の使い方など、日本のルールをきちんと遵守することが徹底できるか、騒音を立てて壁1枚、床1枚を隔てるだけの近隣住民から苦情が寄せられることがないかといったことである。また、民間の借り上げ宿舎のため、これまで建物管理業務、入居者の在室確認、ゴミ出しの管理などを委託していた常駐管理人を置くことができなかった。そのため、UR千代が丘住宅では、これまでの瀬戸交流会館のルールを見直し、厳格化した。同時に、遵守できなかった場合の対応規則も明確に示すこととした。これらを徹底するための対策として、まず推薦指定校に新たなルールと対応を説明した。これについては、国際センター教職員が海外へ赴き、可能な限り直接顔を合わせて説明する機会を設けた。また、居住学生の中から学生リーダーを選出し、学生の自主的な相互チェックを促した。学生リーダーは有償とし、常駐管理人が担当していた業務に加え、舎監への報告、千代が丘団地自治会をはじめとする地域住民との連絡など、相当の業務を担っている。今日に至るまで、学生リーダーは十分にその役割を果たし、学生の自治は一定の成功を収めている。

3 地域住民との共生と交流活動の実践

UR千代が丘住宅における地域交流の実践例として、留学生が地域住民との交流活動に積極的に参画していることは特筆すべきことである。

南山大学とUR都市機構は、住宅借り上げ契約時に、多文化社会に向けた人材の育成と地域コミュニティの形成を推進するための連携協定を締結し、この中で地域コミュニティ活性化への取り組みに関する連携・協力を定めた。

「サロン」と呼ばれ、2カ月に1回開催されるこの交流イベントでは、出身国の紹介、英会話教室、クリスマス飾り製作など、留学生が主体的に企画を立案し、地域住民との交流を実践する。顔の見える交流を通して、お互いの文化を理解し合う中で信頼関係が生まれ、留学生が地域に溶け込む絶好



UR千代が丘団地「サロン」での交流

の機会となっている。同時に、留学生自身も地域交流という新たな学びの場を得たといえる。当初懸念した近隣との問題は、こうした交流活動を通じた良好なコミュニケーション活動によって幾分解消されているようである。

4 今後の発展に向けて

南山大学は、2015年に策定した「国際化ビジョン」の実現に向け、協定校数、受け入れ・派遣留学生数および国際教育交流プログラムの拡大を推し進めている。受け入れ留学生数については、受け入れ組織の拡大や入試方式の新設を行い、リクルーティング活動の強化を図ることによって増加させることを目指している。学生数の増加とともに、当然、宿舎も拡大していかなければならない。国際学生宿舎の充実も、本学の国際化推進における重点課題の一つであり、今後も、留学生に安全・安心な住環境を整備し、多文化交流の学びの場として活性化していくことが必要不可欠であると考えられる。

*UR千代が丘住宅とは、本学の国際学生宿舎としての名称として使用している。



国際的な文化交流、相互理解を育む美大の国際寮

森 敏生 ● 武蔵野美術大学学長補佐（学生支援担当）、造形学部教授

1 グローバル人材育成プログラムと学生寮

武蔵野美術大学は、2012年度に美術大学として初めて、文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」に採択された。事業実施期間の2016年度までの5年間に国際交流協定校が12校増加した。いずれも、世界各地の美術・デザイン分野で実績のある大学である。地道な国際交流を積み重ねながら、現在の国際交流協定校は37校に上っている。

国際交流協定校との協定の中には一部、交換留学制度が含まれている。そのため、留学生の受け入れ態勢が必要とされた。当初は賃貸物件で個別対応していたが、国際交流を広げ積極的に推進するためには大学専用の受け入れ施設が必要になってきた。

他方、本学は日本各地から学生が入学しており、とりわけ女子学生が安心して入寮できる大学専用寮に対するニーズも高かった。そこで、学生寮は女子学生寮と国際寮の二つの機能をまとめた形で計画することとした。

学生寮の管理運営の委託も視野に入れて信頼できる業者を選定し、まず学生寮として利用できる建物を探すことから着手したのである。

2 学生寮の基本的な構想と機能

大学に近く、ある程度の収容人数が確保できる条件の学生寮候補を探したところ、企業の社員寮として使われている建物を全室借り上げ、本学専用寮とすることが決まった。開寮は2014年である。

寮の立地は、緑あふれる玉川上水沿いにあり、キャン



学生寮外観

バスから徒歩20分程度と、大学からは程良い距離である。学生寮近くのバス停からはJＲ立川駅北口へ向かうバスが頻繁に出ている。立川駅は中央線特別快速が利用できるため、新宿駅や東京駅など都心へのアクセスが良い。全部で個室が58あり、収容定員は58名。そのうち10室を国際寮に割り当て、10名の交換留学生の受け入れを可能にした。48室は一般の女子学生用とした。一つの建物に女子学生寮の機能と国際寮の機能を同居させた構想である。

各部屋はバス、トイレ、ミニキッチン、インターネット環境、机、椅子、ベッドなどが備えられた洋室である。各部屋のミニキッチンで自炊することも可能であるが、寮生は共用スペースの食堂で朝夕の寮食を摂れ

るようにした。

交換留学生は寮食を利用することができ、食堂には電子レンジがある。交換留学生と国内の寮生が頻繁に食堂で顔を合わせ、自然に交流できるような仕組みとなっている。

共用スペースには、ランドリールーム、和室、およびアトリエがある。アトリエは、元の社員寮では共同作業スペースとして使われていた部屋を改修した。共用のアトリエスペースは、学生の作品制作に活用されている。集会室は日本らしい風情の残る畳のある共用スペースとして残し、日本的な

「座の生活様式」を自然に体験できるようにした。

こうして、各部屋は個室としてプライバシーが確保できる一方、海外から一人来ている留学生も、共用スペースに行けば他の学生と気軽に交流でき



学生寮居室

るといふ空間が実現した。

寮に求められる大切な基本機能は、安全、安心が担保されていることである。寮には住み込みの管理人が常駐している。寮母は、食堂で栄養バランスの良い食事を提供する。また、寮母は学生の日常的な行動に気を配り、心配な点があれば学生に声を掛けて健康に過ごせるよう配慮している。

3 学生同士が自然と交流する場

国際寮に入寮できるのは、世界各国から来た本学の協定留学生と、その留学生をサポートするレジデント・アシスタント（以下、RA）の学生である。

交換留学生の多くは、約4カ月程度の短期滞在である。受け入れ時期は主に3月、8月としている。RAが留学生の住民

登録から退寮までの4カ月間、日々の生活をサポートする。入寮時には、英語ができるスタッフがオリエンテーションを実施する。

一般の寮生の中にもRAが2名おり、国際寮のRAと協力しながら、留学生との交流会や歓迎会などを自主的に企画・実施している。

毎年4月には、留学生を含む新入生の歓迎会（寿司パーティー）、9月には留学生の歓迎会（バーベキューパーティー）を企画し、寮生と交換留学生が楽しく交流できる場を設けている。そのほかにも、毎月、共用スペースの和室を利用してDVD鑑賞会や小さな食事を実施する。このように、国際寮と一般の女子学生との交流機会を増やしている。

留学生と交流できることは、日本人の女子学生の入寮希望者にとっても大変魅力的であるために、本学の学生



交流する学生たち



留学生着付けイベント

寮は開設以来入寮希望者が多く、常に満室となっている。

4 人間的な成長が期待できる場へ

武蔵野美術大学学生寮は、定員58名のコンパクトな寮であり、コンパクトであるがゆえに、お互いの顔と名前が覚えられ、寮生相互の人的交流が自然に可能になるという大きなメリットがある。

寮は、単なる生活の場を超えて、学生間の国際的な文化交流や相互理解を育む空間として機能している。それは学生の他者への関心を喚起し、相互に楽しみを生み出す発想を刺激し、自主的・協同的な企画と活動を促す教育的意義のある場である。寮という場が学生の人間的な成長に寄与していると考えている。

国際寮は、今夏も8名の交換留学生を受け入れる。寮生活を通じて、各国の交換留学生が豊かな交流と意義ある体験をすることを願っている。

㊦

